

教宣 せぶん

侍ジャパン WBC 2大会連続優勝

日本の良さを見直そう

ワールド・ベースボール・クラシック(WBC)で、日本は2大会連続優勝の栄冠を勝ち取りました。なかなか明るいニュースがなかった日本に大きな感動を与えてくれた“偉業”だったと思います。

さて、今回の大会で目を引いたのが、日本と韓国の際立った“強さ”でした。基本や組織力、緻密さ、そしてチームとしてのまとまりを重視するアジアの“野球”が、個人のパワーやスピードを重視してきたアメリカを代表する“ベースボール”を、完全に凌駕した格好でした。大リーグの一流選手で固め、優勝候補の筆頭と言われたドミニカ共和国は予選リーグで敗退し、アメリカを準決勝ラウンドで破って1位通過したベネズエラは韓国にまったく歯が立ちませんでした。日本が長年追いつくことをめざし、手本としてきたアメリカも、予選からつまずき、辛うじて進出した準決勝の日本戦でも、度重なる守備の乱れから日本に完敗しました。もちろん、アメリカの国そのものや、選手達の“WBC”にかける思いの低さ、故障者の続出などの理由はあるにせよ、今大会を見る限り、“野球”が、“ベースボール”に対し、もはやコンプレックスを感じる必要はまったくなくなったと感じました。“野球”が“ベースボール”を追い越したとまでは言いませんが、今後“ベースボール”がWBCで頂点をめざすなら、日本や韓国の“野球”から、学ばなければならないものがたくさんあると思います。

こうした現象はなにも“野球”の世界に限ったことではないと思います。政治にしても、経済にしても、日本は常にアメリカを見習い、手本とし、そして従ってきました。憲法9条がありながらアメリカの要請に応じ“イラク戦争”に手を貸し、基地の提供や“思いやり予算”など莫大な軍事費を毎年アメリカのために使っています。経済でも、アメリカ発の“強者はより強く、弱者はよ

り弱くなる。新自由主義の考え方によるカジノ経済の破綻によって、日本も未曾有の“被害”を受けています。本家アメリカからも、“イラク戦争”や“新自由主義”への懺悔や反省の声が聞かれる中、日本でもアメリカから距離を置いて、もう一度、日本らしい政治や経済の仕組みを考える時期なのではないでしょうか。

23日の金融3争議共同行動の際に、アメリカ人の通行人に英語ピラを渡した組合員が「こんな従業員の首切り事件はアメリカでは当たり前だ」と言われたという話しがリレートークで語られましたが、なにもアメリカの基準が、日本の基準でも、世界の基準でもありません。「企業利益のためなら当たり前のように従業員の雇用を破壊するアメリカのような社会にしないためにも、私たちはたたかっているんだ」と胸を張って言いたいと思います。

アメリカの言いなりや、アメリカを目標にするのではなく、日本は、もっと自らが培ってきた感覚や仕組みに、自信や誇りを持ってよいのではないか。WBCでの侍ジャパンのたたかいぶりから、そんな感想をもちました。